

令和3年11月26日 教養研究センター基盤研究：文理連接  
話題提供者：小菅隼人

西山雄二編著『いま言葉で息をするために：ウイルス時代の人文知』勁草書房，2021.

## ■文学

### 7. ミシェル・ドゥギー（1930年生，詩人・哲学者）

コロナ時評

2020年3月13日 コロナ化. ドゥギーは、「詩」の役割を「言葉のイメージ化」と捉える。この詩においては、コロナと関連付けて、政治家の名前を多く出し、世界を鳥瞰的周遊していくイメージを与える。特に印象に残る詩行として、「〈承認〉という表現は良識を失ってしまい／レヴィナスを離れてDNAをなぞっている」（131）があるが、ここには「フランス語 reconnaissance には〈承認、識別、感謝〉といった意味がある。ここでは哲学者レヴィナスが重視した他者の〈承認〉が軽視され、人間の科学的な〈識別〉が幅を利かせて状況を指している」（注7，154）という訳注が振られている。レヴィナス（1906-95）は、リトアニア生まれのユダヤ人。自身はフランス正規軍に属していたため生き延びるが家族の殆どは虐殺された。特に「顔」はレヴィナスの他者論のキーワードで、他者と私が対面する状況を表し、顔は呼びかけ、問われる出来事を表すから、**マスクをつけて、PCR検査が優先されたコロナ状況は、まさに、承認よりも識別を重視する**と言えるのかもしれない。

2020年3月22日 みんなが同じようには行動することはできない。普遍的な行動原則に従うというカントの定言命法は、今日、個人として思考する人格ではなく、国家の問題となる。そこでは、道徳と政治、普遍と一般が乖離する。今日において、「避難」をもう一度考え直し、グローバルではない別の世界をもう一度創造しなおさなければならない。ここでドゥギーは「この感染流行は、観光旅行をやめて〈ステイ・ホームする〉ことを〈私たち〉に命ずる。その代わりに、近場でもできる別種の世界一周の機会が提供される…すなわち、〈再生可能なもの〉のラディカルな環境—詩倫理—学（エコ・ポエティコ・ロジック）」（135）と述べる。詩が、音とイメージを梃にして、事物を公式的な関係から解き放って、新しい私的（詩的）な関係と現実（antagonistic official view of reality）を見出す術だとすれば、コロナ禍は詩的世界を見出す契機になるかもしれない。

2020年3月28日 詩と政治的正しさ。ヘイトに対抗する手段：詩が行うこと＝語ることに耳を傾けること。詩は似ているものによって認識させること、つまり接近させることで語ることであり、接近する物もされる物も共に恵みを得る。言い換えれば、詩は翻訳という行為と同じく、拡大によって普遍性と多様性を実現する。

2020年4月3日 死の病。人類は埋葬によって人間化されていたが、今やそれが脅かされている。①延命による疑似的な不死の獲得、②核の冬（全人類の消滅）に飛び込む可能性。ここで埋葬に言及されるが、\*ソフォクレスによって『アンティゴネ』で提起された埋葬の正当性は、コロナ禍によって、共同体と人権の対立において顕在化した。

2020年4月16日 ミニマ・モラリア，第1章：言語学。フランス語の腐敗。① ne の省略

について、②語末 e を響かせる。言語が普遍的なものから離れて、個人的な省略や強調が行われる時、腐敗 (Corruption) の意味が、当初アリストテレスが使ったような時間的な摩擦を表すニュアンスから、強引な侵略や改変を意味してきているのかもしれない。

2020年5月16日 〈世界〉間の戦争。終わりへの切迫感が我々に付き纏っている。①死の終わり、②生殖の終わり、③労働の終わり、④諸言語の終わり、芸術の終わり、⑤コーン・ベンディット運動 (私たちが、実際の存在や信念とは違っても、私たちは皆ドイツ系ユダヤ人である、私たちは領土の外側で食事をすることができると宣言することで連帯できるとする運動) の終わり。終わりから連想して、無ということに至れば、「〈無〉の共有」(何も共有していない) という事実が動物種を保護してくれる。対立する両者は、お互いが所有できる可能性があるものをめぐって対立するのだとすれば、お互いが所有をわけることで世界間の戦争はなくなるのかもしれない。

2020年5月16日 広告についての再論。コロナ禍においても、広告は我が物顔にスクリーンを支配している。広告は無制約的で把握が困難。それは「空気」と同じで(「広告は私たちの空気的一切だ」)である。そして、空気は、①元素もしくは場であり、②呼吸可能な物もしくは生存条件であり、③事物の諸相であり、そして、実在の音楽(アリア)とすれば、広告は目に見えない言葉であり、同時に、経済の駆動輪としてイメージであり、それは真実なき主張である。「判断の外部、責任の埒外、罰則の適用外にあり、全面的に有害にして無害である」(149) ヴィジュアル化されたイメージは偶像(アイコン)となり、詩(「言葉に含まれる言語化されたイメージ」)は取って代わられる。

2020年12月17日 ウイルスとワクチン。グローバル化したウイルス＝トランプ主義＝退廃、マフィア化、強制移住、普遍的犯罪(ツイートの形をとった嘘とヘイト)。これに対抗するためのワクチンとは何か? AI以前の「集合知」の復活が不可能だとすれば、①神々に終わりについての省察、②フランス的「政教分離」の理解、③詩的環境論の展開、がフランス的に組成されたワクチンということになる。

#### \*解説

- ① コロナ禍にあって日記やクロニクルが脚光を浴びる。
- ② ドゥギーは感染を直接扱っていない。
- ③ 感染を比喻・レトリックとして語っていて、それがドゥギーの方法であり、詩の方法と言っている。「のように(Comme)の詩人」と呼ばれる。

\*\*\*\*\*

#### 8. オーレリー・パリュ (1984年生, 比較文学)

「カミュの『ペスト』, 断固として現代的な作品——ポストモダンの時代にこそ現代性の全容が現れるという逆説」

カミュ『ペスト』の不評: 作品の寓意性・象徴性が強調されるあまり、統一的思想・思考を素朴に信奉するという近代主義の誤謬に陥っている。

なにはともあれ、『ペスト』は偉大な作品だ。しかし細部のほうが作品全体より優れて

いることが多い。寓意的な象徴主義がやや目に余る全体の構成よりも、諸々の特徴的な場面の方が力強い。奥深い知性を備えた様々な動機をもつ登場人物たちだが、彼らは、カテゴリー（人間主義的英雄、無神論者、神父など）とは言わないまでも、「人物類型」として、凝った「場面」に据えられるあまり、時おり現実味を欠いているように見える。（168；qtd. ベルナール・フォコニエ、強調小菅）

#### ポストモダン文学の中の伝染病小説

- アンドレ・ブリンク（南アフリカ）『ペストの壁』（1983）
- ガルシア＝マルケス（コロンビア）『コレラ時代の愛』（1985）
- サラマーゴ（ポルトガル）『白の闇』（1995）
- スチュワート・オナン（アメリカ）『死への祈り』（1999）

#### モダニズムとポストモダニズム：

- 「ポストモダン文学」：①異種混濁性，②多声性，③メタ反省的かつ多義的，④作品の意味の捉え難さ。〔リンダ・ハッチオン『ポストモダニズムの詩学』（1988）〕
- 「モダニズム」（近代文学）の近代性が，①主観性の拡大，②語りの審級への工夫，③ジャンル間の横断，④断片形式や断続的な語りへの関心，⑤メタ文学的次元，⑥古典文化と大衆文化の接続〔メアリー・クラークス〕

モダニズムとポストモダニズムを分かちのは、手法や特徴ではなく、世界観ということになる。→近代文学は統一的な意味の再発見（「大きな物語」〈リオタール〉の発見）を目指しているのに対し、ポストモダニズム的なものは「大きな物語が、あらゆる形態の社会的実践および組織に含まれている矛盾と不安定さを覆い隠すのだという認識を持ち、批判する」（171）、そして、「反対にポストモダニズムは、断片的、一時的なもの、不統一といった観念を嘆かわしいものとは考えず、むしろそれら一切を讃える。世界に意味なんてないのではないか、そうだとすると、芸術が世界の意味を創るのだ、とは言わないようにしよう。不条理と戯れることを受け入れよう」（170）。【(感想) それでも、文学を書くのは、いずれにしてもこの世界を言葉によって捉えたい、あるいは世界そのもの（＝神）である言葉を見たいという欲望があるからだ】

近代性もポストモダンもそれまでの方法の刷新を目指したならば、その間に断絶はなく、むしろその繋がりを問うてみたい。

#### 寓意の構築——カミュからサラマーゴへ

##### 象徴性への誘導

『ペスト』のエピグラフ「実際に存在するものを存在しないもので代理するのがつねに理に適っているのと同じように、ある種の監禁状態を別の監禁状態で代理することも理に適っている」（デフォー『ペスト』からの引用）→**ペストを監禁状態への抵抗＝ナチズムへの抵抗という寓意性に向かわせる**。寓意性の擁護。【(感想) 『アンティゴネ』の問題を、ナチスドイツになぞらえるブレヒトやアヌイは、この寓意性をあらわしているし、埋葬と監禁の問題になればなおさらである。こういう再寓意化は、オリジナル作品に新たな意味を見出させる】

『白い闇』のエピグラフ「見えるなら、よく見よ。よく見えるならじっと見よ」(イブン・アラビー『訓戒の書』)(173)→見ること=修復することの喚起。文字通りの視力の問題ではなく、明確な意識付けを促すという意味で寓意的。さらにこのエピグラフ自体の引用による異種混淆性と、引用への信頼性に疑問を投げかけることで読者を試している。

時空間の寓意性：オランという独立世界。サラマーゴの匿名的世界。太陽の導入。

『ペスト』のポストモダン性

ジャンル：物語と小説というジャンルの区分を曖昧にしている。

文体：無味乾燥な単純さ

語り手：存在感を示すと同時に匿名であり、中立的でありつつ、批評を加える。多声的な存在。三人称でありながら、一人称にもなる。語り手は内部にも外部にも存在し、結局は登場人物の一人であるリウー医師であることが明かされる。

### 読者を巻き込む作品

物語の意味：ナチス占領下での抵抗を表すのと同じくらい、伝染病流行の現実を現わしている。伝染病はもはや神の罰ではないということ(神は死んだ)。カミュやサラマーゴが宗教を担うものをたびたび持ち出すのは、彼らへの信頼を剥奪するためである。つまり、神が死んだ代わりに悪の責任も人間が担わなければならない。自然に起こり、いつの間にか収束していく伝染病は、それをナチズムという明確な悪をもった出来事と重ね合わせることを困難にする。それがすべて人間の責任であっても人間が闘うべき相手特定させないからだ。それは、結末の曖昧さに現れている。『ペスト』においても『白い闇』においても、伝染病を通じて取り戻されたかのような共同体は再び伝染病によって解体されるかもしれないのだ。

言葉についての思索：簡潔性→形容詞の排除。

**【参考】カミュ『ペスト』宮崎嶺雄訳(新潮文庫)、三野博司訳(岩波文庫)。**

眩しい陽光が降り注ぎ、病的なほど明るいアルジェリアのオラン。数匹の鼠の死骸はやがて、手押し車一杯の死骸の山となり、オランはペストの町として閉鎖される。医師リウーは、病気療養中の妻と離れて暮らしており、町に母親と共に残されている。やがて救援隊を組織するタルー、町への偶然の来訪者であり町外に出ることを切望していた新聞記者ランベールらと共に、リウーは、ペストとの闘いを始める。ペストを神の懲罰として進んで受け入れることを説くパヌルー神父、ペストの災厄に生きがいと喜びを感じる犯罪者コタール、子供を死なせてなおペストを敵と見なしきれない判事オトンなどの人間像と思想が閉鎖された町という状況下で描き出される。やがて、ペストはなんの前触れもなく収束し町は開放されるが、ペストはそれぞれの生き方に確実に変化を及ぼしていた。タルーはペストの終息期に罹患し死亡する。

### 伝染病としてのペストの意味

- ペストは、外的なものから内的なものへと意味を移して行く。ランベールにとって、恋人との別離が現実でありペストは抽象である。ペストは罹患者になるまでは非現実であるが、それに伴う隔離や別離は現実である。そして大部分の人間は非罹患者である。この意味でペストは肉体への問題というよりも精神への問題となってゆく。
- ペストは、個人を融解する。すなわち、個人という単位を曖昧にする。オラン市にとって余所者であったはずのランベールは、必死に脱出を画策するも、結局はオラン市に取り込まれる。
- 人それぞれはペストを内包する。パヌルー神父は、ペストは神により与えられた精神的試練であり、罰であるとする。しかし、タルーは、健康・清浄は意志の結果であり、それを少し緩めるや否や病毒を移してしまうと考える。立派な人でさえ何らかの形で人を殺したり、殺させたりせずには生きてゆけないし、人を死なせる恐れなしに身振り一つ出来ない。それが生の論理である。検事であった父親の姿にタルーはそれを見出す(302)。

★『オルフェウスとユリディーチェ』の上演最中舞台上でペストによって倒れる役者の場面(236-7)。

\*\*\*\*\*

## 9. トーマス・シュタンゲル (1966年生, 作家)

### 「コロナ日記」

解説によれば、この「コロナ日記」は、オーストリア・グラーツ文学館の企画によって、19名の作家が参加し、2020年3月20日から7月30日までウェブサイトで連載された。コンセプトは「このコロナ時代を私たちの生活の中断としてではなくその一部とみなすこと」「文化シーンにおいてアクティブであり続けること」である。

この日記の中では、コロナ禍を基底として、報道、分断、空襲としてのコロナ禍、喉への意識、精神の危機、買い物、数字、政治的対立、マスメディアの姿勢、マスク、データ、数字、死に方、神々のいない時代の病気としてのコロナ、禁止、恋人関係についての意識が記録される。そして、最後にそれを日記として記録することへの自意識が日記の中で、つまり、メタ日記として語られる。

ここで最も興味深いのは**コロナ禍における文学活動の在り方と、日記という方法への反省である**。コロナ禍において、人間の生き方の選択肢は、仕事においても、日常生活においても、精神的な関心の向け方においても、強制的に大幅に狭められた。その中で、自らの精神を記録するために「日記」という方法の本質的性質(私的感想か公的記録か、事実かフィクションか)とその有効性が問いかけられる。【(感想) 災厄の時代には日記という方法は、演劇という方法よりもはるかに有効で適切な状況のように見える。それは、日記がその日時に感じたことの記録であり、そのことにおいて意味を持つから、それが『アンネの日記』のように途中で断絶されても、価値を持つからである(日記は分断を怖れない)。また、それは、フィクションではないから、その時代を経験した人とは状況を共有しているという点で

共感しやすい〔日記は状況に密着する〕。その時代を経験していない人にとっては、事態への解釈の記録として、災厄を前にして人間がどのように行動し、どのように思っているかの記録となる。つまり、人間を知ることができる〔日記は書き手を暴露する〕】